

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究(三十二)——

津 守 真

五歳児の後半には、子どもによっては、小学校入学の問題が身近に迫ってきて、不安定になる時がある。ことに、知恵おくれの子どものグループでは、毎年、秋になるとこのことが私共の心を重くする。もちろん、これは親の問題であって、子どもが心配することではないのであるが、親の不安は子どもの生活を動揺させる。

このことは、知恵おくれの子どもの場合に、際立った形で表にあらわれるが、入学や入園を目前にした子どもにも共通のことである。次に掲げるのは、愛育の知恵おくれの幼児のグループで、たまたま私が出会ったことである。

五歳児の後半になって、子どもの調子が良いと思っている間に、急に行動が荒れてくるようなとき、小学校に上れるかどうか心配して、親が子どもの能力以上のことを要求しはじめていることにしばしば気が付く。あちこちに相談にいくたびに動揺し、入学の規準が過大に認識されて、子どもの現状に対する不満がつの

一月二十三日

朝、Uが走って登園してくるのに出会った。玄関の台の上の新

聞を手ではねとぼしてかけてきたので、私は手をひろげて受けとめた。「赤ちゃん、赤ちゃん」と云うので、私は抱いてやると、「プヤッて」と云って、ほっぺたを差し出す。

この日、ひるま、何回か他の子どもの髪の毛を引張った。

きょうは、母親がUを小学校入学の面接につれてゆくので、いつもより早く迎えにきた。Uは母親をみると、「公園」と叫んで、母親を部屋の外に押しやり、「バイバイ」を云う。私は、少し気をまぎらわしてからつれてくるからと云って、Uを抱く。Uは戸口の鍵をかけてくれという。

庭にかけ出してゆくので私も一緒に出る。すべり台を何度もすべる。しばらくやってから、私は、「もう一回滑ったらかえろう」と云うがかえろうとしない。「せんせいはかえるからね」と云って部屋の方に歩いてくると追いかけてくる。私はUを抱いて母親のところにつれてゆく。母親は洋服をむりにぬがせると、Uは母親の髪を引張ったり、つねったりして、母親も本気になって怒る。それでもようやく着かえさせると、母親は「みんなもさよならだからね」と云うので、私は母親と一緒にさよならの歌をうたうと、一人で廊下に出てゆく。驚いたことに、その顔は、涙をぼろぼろ出して泣いている。本当に悲しそうに泣いている。私はUの泣き顔を見たのは、はじめてであった。

手にふれるものをはねのけて走る

朝、登園してきたとき、Uは玄関の台の上の新聞をはねのけて走ってきた。Uにとっては、手にふれたものは、新聞であろうと、何であろうと、ふり払い、はねのけるのであった。何もかも気に入らない様子だった。しかし、私が廊下で手をひろげると、意外にも、すっぽりと腕の中に入ってきた。「赤ちゃん」と云い、「プヤッて」と云ってほっぺたを差し出したので、私はほっぺたに唇をつけてやると嬉しそうであった。こういうときの子どもの肌ざわりは、柔らかく心地よい。

そのあと、何回か他の子どもの髪の毛を引張った。新聞をはねのけて走ると類似の行動である。この日のUの内面は、何か荒れていることが私には感じられた。

涙を流したこと

この日の最後に、Uが涙をぼろぼろ流し、顔を涙でくしゃくしゃにしているのを見たときに、それは予期していなかったことなので、私は驚いた。もっと遊んでいたかったのか、母親と帰るのが嫌だったのか、小学校入学の面接にゆくのがいやだったのか、あるいはもっと他の理由なのか、恐らくその全部が関係していたと思うが、私はUの泣き顔を見たのは三年間の中ではじめてであったことから考えると、この日の特殊事情である。小学校入学の面接が大きな関係をもっていたと思う。

知恵おくれの子どもたちは、その生育歴の中で、何度も病院や相談所につれてゆかれたことがあるのが普通である。そのたびに、知恵はおくれていても、さまざまな体験をしているに違いはない。まだこんなことができないと自分のことが語られ、また親の嘆きを見る。ことばを話すことのできない子どもでも、自分のことが高められて語られているときと、低められて語られているときでは、違った感じ方しているだろうと思う。

一般には、ことばを話さない子どもが、おとな同士の会話を理解するはずがないと思われがちである。しかし、よく注意してみると、おとなの考えていることは、表情や微妙な動作にあらわれ

ている。子どもの存在を、喜ばしく思い、親が誇らしく思っているとき、おとなは微笑み、目は優しく、差し出す腕はゆるやかに伸びている。その子のすることが気に入らず、その子の存在を名譽なことと思っていないとき、おとなが子どもに向ける身体全体は緊張し、子どもは自ら表情は厳しくなるであろう。ことばを話さない子どもでも、周囲のおとなが自分を受けいれてくれているかどうかは、全身の感覚を通して察知している。ときによると、子どもが何にも反応を示さない場合にも、それはおとなの評価する眼から自分を守るために、わざと反応を拒んでいることもある。

相談や検査、面接などにつれてゆかれるたびに、こうした体験をしている子どもたちが、入学のための面接にゆくの嫌がるのは当然とも云えよう。Uが涙を流して泣いたのには、自分が精一杯のことをしても、受けいれてくれない社会に対する悔やしさを怒りや、悲しさなどが含まれているのであろうと思う。

ここで私が考えていたことの輪郭を辿ることができなくて苦心していた夜、私は夢を見た。夢の話をおんなところに挿入することは本論と無関係と思われるかもしれないが、ここで考えている

のは私であり、夢の中である感情を体験しているのも私であるから、私は連続した作業をしているのである。今までにも、同様のことはあるが、今回は敢てこのことを記す次第である。

私は娘をつれて、遊園地でメリーゴーランドを見ている。娘はもっとよく見たいと云い、私は娘を抱きかかえて、ぐるぐる回るメリーゴーランドを、人ごみの頭ごしにようやく見せてやる。私は目を覚まして、娘を抱きかかえて見せてやったときの、身を乗り出していたあの喜びと、ようやく支えながら望みを叶えてやったときの温かい感触とを体の中に感じていた。朝、起きてから、高校生の娘にその話をする、娘はニヤと笑って、「あたし、お父さんとメリーゴーランドにいったことあるよ」と云った。きつとこの感覚を実際に、お互いに何度も味わったことがあるのだと思う。幼い子どもとの間に体験するあの柔らかな感覚である。知恵おくれや情緒障害児といわれる子どもも、実際に保育をする、この感覚においてかわりはない。もっと純粹にその喜びを示してくれることもしばしばである。Uも情緒障害児と診断されてきた子どもである。

どの子どもも、身近なところで自分自身の望みをもち、それが叶えられることを求めている。学校や幼稚園でも、他の子どもと比べるとやや幼稚な段階で、この子どもたちはおとなとゆっくり

と交りつつ、物と交わることのできる生活を求めている。それを理解されずに、能力の程度や情緒の安定度によって評価されるとき、子どもはおとなとの間の平和な感覚を失い、荒れた行動を示す。

こう云っても、私は、知恵おくれの子どもや情緒障害児がすべて普通学級に入れるようになれば問題が解決するとは思わない。今よりもっと普通の幼稚園や学校で受け入れられればよいと思う。けれども、そこでその子どもたちに応じて満足のゆく生活が与えられなければ、彼らは決して幸せにならないだろう。どんな種類の幼稚園や学校であろうと、おとなからの評価の目を感じることなく、子ども自身が安心して、満足のゆく生活できる場を備えることがたいせつなのだと思う。

母親を押し出す

母親には子どもの気持が分らないではないだろう。むしろ、子どもと一緒にあって悔やしく思い、悲しく思う。しかし、それでもなお、少しでも人並みに見られたい気持がはたらく。そこには

母親の内心の葛藤がある。それが子どもには煩わしく感じられるかもしれない。母親と一緒の空間にはいれば、母親の期待に沿わなければならない。それに伴う葛藤に巻き込まれる。その煩わしさから逃れるかのように、子どもは母親を押し出して戸口に鍵をかけることを要求する。Uは母親を部屋から押し出すことによって、自分自身の独立の空間をつくろうとする。今や、子どもは自分の力で、思うように遊ぶことの方が好ましくなったのである。

母親を押し出した後、子どもは屋外をかけまわり、滑り台の上から下を見おろし、スピードですべりおろすことをくり返す。

五歳児の後半には、知恵遅れの幼児のグループでは、こうした姿がしばしば見られる。母親から離れて自由に遊べるようになるまで、何カ月も、時には、一年も二年もかかって後、ようやく自分で遊べるようになる子どももある。自分で思うように身体を動かし、精神を働かせることを獲得した子どもは、その喜びの方を選ぶ。母親を外に押し出し、いつまでも遊んでいて降りたがらない。

母親の側について云うならば、子どもが求めてくるときには腕の中に抱き入れるのであり、子どもが自らの道を見出して何かをしはじめたときには、後を追わず、干渉しないのが自然である

う。

五歳児の後半は、幼稚園生活の中でも、子どもたちが最もよく遊べる時期である。しかしまた同時に、小学校入学の準備のために、親も子も生活を乱されることの多い時期である。知恵遅れの子どもにその典型を見たが、普通の子どもにも、その内心に、同様のことが起っているのであると思う。

(つづく)

